

文
字
考

(筆順、扁の形・体の変化についての一考察)

小
木
良
一

漢字は複雑で非能率的だと指摘され、当用漢字・教育漢字と制限され、又表記も仮名化への方向を辿った時期もありました。漢字の視覚性、表意文字としての現代性を再評価した現在は制限もゆるめられ、関心も強くなってきたと思います。文字を素材として芸術活動をする書道で、文字を無視することは決して許されません。その中で、私は漢字特に古代の文字、甲骨文字、鐘鼎文字に魅かれています。加藤常賢博士の説文金文学の講義を受けて十五年を過ぎました。漢字の成り立ちの興味の外に、細かい部分の形の配慮に興味あることを知って、古代人の叡知と造形力に驚いています。ここで筆順、扁の形・体の変化についての小論をまとめてみました。文字学の初歩とでも解して頂ければよいと思います。以後出てくる契文とは、亀甲獣骨文のことで、卜占（ウラナイ）の為に亀の甲や獣の骨に直接鑿くのようなもので切った文字のことです。西暦前一三〇〇年頃より一一〇〇年頃迄の殷代のもとと云われ、これは中国最古の文字です。金文とは鐘鼎文のことで、筆で文字を書き銅で铸造された酒器・祭器等に残された文字で、殷・周時代のもので、篆文は秦代のもので、文字として一応完成され草書・楷書の基をなしているものです。


分

分金
分篆

切る意味を表わす「刀」と、別れた木を表わす「八」とから成り、切り分ける意味である。説文解字に「別物に分ける」と出ている。「八」は別れた木であるから間をあげなくては意味がない。






九

九契
九金
九篆




肘ヒジの形で象形文字である。(チュウ音とくねくねしている意から、「蛇」字の説もあるが今は採らない) 曲げ伸ばしすることが出来てくねくねしている。指は三本しか書いてないが(右字も同じ)、ここでは細部まで必要ないのであろう。「」がそのまま九となる。及も同じ筆順である。¹力の筆順は刀万方別がある。教詞の九は借用である。

右





右金
右篆




「」は右手で(「口」は補助する意)ある。「」が横画になるので、「」が「」「」になる。右字の外にこの筆順と同じ文字は有(右手に肉を持つ意)布・希がある。







左   

「」は左手（「工」は斧の形であつて、引伸義は工作の意）である。「」の  が一となる。右と左は筆順の違いから形にまで作
用するから注意したい。外に友（右手を二つ重ねた形であるが、現在の友は間違ひのままこの筆順になっている）存・在・抜がある。








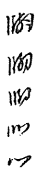
必   




「」は「」で矛の柄である。「八」は両側をしっかりと巻きつけた竹である。「」を原則（右手で書く場合左から書く）に従つて
132となり「」に直したものである。

賞   

「尚」と「貝」とから成っている。尚の基本形は    で「八」は煙が上に出るの意である。「」は横窓の象形である。尚の意
味は「上にのぼる」「たかい」「たかくする」「たつとぶ」の意になる。「」が「」になった。賞は貝（貨幣）を尚び、賜うの意であ
る。これと同じ筆順の字に裳・掌・常、転音の當（当）・黨（党）・堂がある。

学   

契文は手振り身振りの意味を表わす「」（二つの爪即ち両手）と、音を表わす「」（家屋の入母屋と千木と交わった形）を合わせた字
である。金文・篆文はそれに子を加えて意味を一層明確にしている。即ち子供に手振り身振りで儀礼などを教える意である。後に「」が省
略されて「」の教の扁のまで、孝行の孝ではない。孝（）は、老の省略と子との合字で老人を養う意である。字となる。学の古い
字の學は、隷書で學と學に書かれ、前者は「」の変形、後者は「」の古い字「與」の上部の誤字と思われる。
これが草書で  となり学となったと考えられる。覺も同じである。

教   




「**𡇗**子」字と鞭むちを持って打つ意を表わす「**𡇗**」(右手と棒)と合わせた「教」字は「學」字と同じ字で、これは鞭で打って習わせる意である。「**孝**」は「**𡇗**」が「**𡇗**」「**𡇗**」となつて**孝**になる。「**一**」は「**ト**」「**ㄩ**」は「**メ**」となり「**女**」となる。


女
 契文  金文  篆文 




跪坐かざして手を交えて体をくねくねした形。**𡇗**を**𡇗**と向きをかえ、尻の部分を省略して書き易くしたものである。女扁が**女**となるのは終画が旁に続き易い為である。

母
 契文  金文  篆文 



女に两点を加えた形で两点は乳房である。これも「女」と同様に變化したものである。「母」はその意から別字である。問題多い当用漢字に「母」「分」が意味を表わす「**、**」「**八**」を残して古意をそのままにしているのは、当然ながらうれしいことである。




登
 契文  金文  篆文 

止は足跡あしあとでと書く。**北**は両足跡である。山に登るには両足を踏ん張るので、その形そのものである。契・金文は両手までかいて、両手両足でふんばって登っているのが面白い。豆(トウ音は高い所にのぼる意を表わす)は音である。**𡇗**の2・5を省いて**𡇗**、左上から書く原則に従えば現在の**𡇗**となる。

祭
 契文  金文  篆文 

契文の「**𡇗**」は肉で「**𡇗**」は血、「**山**」は「**𡇗**」が基本形で机である。「**示**」はそれに「**一**」(肉や品物)をのせた形である。手に肉(犠牲の動物の肉)を持って机の上に置く意で、神に肉を献ずるのである。田舎の祭でその土地で収穫された米や野菜類を、サンボウの上ののせて神前に供するのを見れば、祭の起源がそのまま伝わっていることが理解されるであろう。「**登**」と「**祭**」との上部の間違いが多く見られ、この二字の起源を知れば、視覚的にも似ていると思えないはずである。

衆  文金  文篆

目と人を三人書いている。目は顔を代表して頭全体の意味であるから、多くの人の意味になる。楷書で「血」と書くのは間違いで、血は  文契
 文篆 と書き皿の中に血塊のある形である。又下の人三人を左から書くべきところを今は中より書いている。従って衆と書けば誤りであることが判然とするであろう。現在の中国の衆の字は  としてゐるがこの方がいい。



扁と旁から出来ている文字の場合は、必ず扁の形を不安定にして旁を書きますが、扁は

一、言扁のようにそのままのもの



二、手扁のように手とは別字の如く書いて呼び方で手の意を残しているもの

と二通りあり、ここでは主に 二、を分解して説明したいと思います。


示  文契  文金  文篆

契文の  (即ち机) の象形、金文の「」は血とも解せる。示は、犠牲の肉を神に献ずる意である。示 扁のつく社・祈・祝等の文字は示が神の意に引伸されて使用されているのである。又この示 扁は筆順をかえて、扁と旁とを組合せ易くするようにしたものである。

衣  文契  文金  文篆

衣物の衿の形「」と、左右の袖の形「」とを書いて衣物全体を表わしている。この字も、示 扁になると示 扁と同じく旁の部分を書き易いようにしたものである。示 扁と示 扁を間違えて書いているのを見るが、二字を理解すれば、そのような誤りはないはずである。


行  文契  文金  文篆

十字路の形で象形そのものである。示 扁はその左半分である。示は「」で「行」と「止」で道路を歩く意である。それが略された左半

分と止とで  となったと思われる。




延 延

篆文

道路を前進する意味の「延」(延)と「ノ」(エイ音で速を表わす)との合字である。「延」は「ノ」(イ)が「延」と同じく変化して  となつて延となつたと解す。













手 手

篆文

五本の指と掌と撃との形、手は「」の「」(四本の指)を横二画にまとめたもので、 扁はそれに「ノ」と「一」とを一画にして、扁から旁に続き易くして筆順をかえたものである。









水 水

篆文

「」は水流の形、「」は水のさざ波の形である。川  契文  金文  篆文  水が両岸の間を流れている形)と比べると造字の苦心や区別も理解出来る。「」は漢代の印に「」又「」とあり、天發神識碑(三国(呉)時代)に出てくる多くの三水(散水ともいわれるが、三本で水を表わし、 は二本で水を表わすから二水)は「」とあるのを参考とすると、「」の上半分のみを横に直したものである。これは「女」と同じく他に例もあるので考えられることである。それが才・艸と同じく最後の画が旁に続く為になつたと考へて誤りないと思われれる。



氷 氷

篆文

意味を表わす「水」と、氷の凝結を示す「」の合わせた字である。勿論「水」に「」の一つ省いた「」とで現在の氷が生れている。ゝは「」が横画「」となり、冷・凍・寒(氷結する意)等の字は、当然水の意を表わしている。次(数詞の「」と、欠伸(伸)の意又は口をあける意の「」(ウ)との合字)のゝは「」で、二番目の意もここから出てくるから氷とは無縁である。


心 心

篆文




心臓の形である。これが扁の場合  と書かれ、三・四画が続き一画となる（食が食と書かれ一画省かれるのと同様）それを筆順をかえれば  となる。

白  文契  文金 

 は冨のむっくりと高起している形である。一説には  (篆文で ) で山側の意とあるが、どちらにしても小高いむっくりしたものとして異論がない。これが引伸義として、衆団の意にもなったのであろう。筆順は  が  となる。師はそのまま形を使っている。















木  文契  文金  文篆 

立ち木の象形である。本はそれに「丁」(下の契文篆文)を加えて根の意になり、引伸して大切なものの意となる。本(ブック)・根本の意がそれである。末(末)は木に「二」を加え木の尖端の意で梢である。根本・末梢はその組合せまで反対で面白い。以上は何れも指示文字である。木は、右に旁を書く為に「」を小さくしている。他にネ・ネ・ネ等も同様である。



禾  文契  文金 


これは穀禾の象形である。ノギヘンと云うのは、キヘンと間違え易いので区別する為の名称である。ニンベンとギョウニンベンと同じである。

肉  文契  文金  文篆 

切り離した獣肉とその筋のある形である。元の音はジュクで柔軟な意である。印肉の肉の使用例はその意をよく表わしている。これが月  (D)  文契  文金  文篆  の篆文と似ており、区別する為にニクツキと呼んでいるのは、禾等と同様である。ツキヘンは少ない。肝・臟・腸・脈。肥は肉である。服  (服)  文契  文金  文篆  盤の形の「日」と音を表わす  との合字である。フクは人の伏する意で、服は盤にうつむいて仕事する意である。)と勝  (勝)  文篆  券はショウ・ヨウ音で揚の意である。それに「力」の意味を加えて、勝は、任る・克つ意味である)は別である。

貝  文契  文金  文篆

貝殻の形である。時・財等はこの種である。貨幣として使用した関係で、金銭か値段に関する文字に多く使用される。則  文金  文篆 「刀」と「鼎」で、刀で創つくつける意の字で篆文は貝に誤っている。は別である。




犬  文契  文金  文篆

犬の象形である。犴は篆文の「犴」の「犴」を省いたものである。意味は「犯」（犬が人に害する）の如く犬に關した字であったが、一般に広い意味で獸の意にも使用して獸扁と云うのであろう。

牛  文契  文金  文篆

牛の角と頭とを背後から見た形である。これを牛とし、筆順をかえたのが犴である。犠牲の牛扁は、牛が「ギセイ」として代表されて使用されてに過ぎない。

玉  文契  文金  文篆

紐ヒキで玉を連結した形である。よく王（ 文契  文金  文篆 斧の形）と間違えるが、王は上二本の横画の間が狭く、玉は等間隔である。王はタマヘンでオウヘンではない。「、」の省略は犬の「犴」を省いて「犴」としたのと同じで、旁に続く關係で他にも例が多い。

参考資料

説文解字

漢字の起源

甲骨文編

大漢和辞典

朝陽字鑑精萃

許慎

角川書店

芸文印書館

大修館書店

西島書房

加藤常賢

諸橋轍次

高田忠周